

## 少年スポーツの現状と課題—碧山サッカークラブを事例として—

### The present condition and subject of junior sports—a case of Hekizan soccer club—

1K03B802-6

橋本伸一郎

指導教員 主査 作野誠一 助教授 副査 木村和彦 教授

#### 【緒言】

スポーツ少年団は、財団法人日本体育協会がその創立（1911年）50周年の記念事業として「一人でも多くの青少年にスポーツの歓びを」「スポーツを通じて青少年のからだところを育てる組織を地域社会に」と願い、1962年に創設された。そして今日までの少年スポーツに多大な影響を与えてきたのは事実である。しかし、今日におけるスポーツ少年団の多くは、この本来の理念の継続がなされておらず、「子どもだけの」、「単一種目活動による」、「競技スポーツのジュニア集団」といったチーム的活動形態になっているケースが少なくない。また、単一種目のクラブ化が増えたことでスポーツ少年団に加入するメリットがないということで加入をやめ、独自に組織をつくっては活動する少年スポーツクラブが増えた。つまり本来の理念とは逆の方向を辿ってしまっているといっても過言ではない。そのために、様々な課題が発生している。筆者自身、ボランティアとして小学生にサッカーを週に3回のローテーションで教えている。このクラブも冒頭に挙げた特徴とほぼ合致するスポーツクラブであるといえる。今年で4年目になるのだが、その中でいくつかの問題点に気がついた。筆者は組織としてのクラブ運営や組織を形成する人々のクラブに対する意識に問題があるのではないかと感じた。本研究では、少年スポーツの問題点を碧山サッカークラブと照らし合わせることで、「碧山サッカークラブの現状と課題」を調べ上げることとした。

#### 【研究方法】

先行研究によって、戦後から今日に至るまで少年スポーツを先導してきたスポーツ少年団の歴史と変容を確認することで今日の少年スポーツの課題を言及する。

また、本クラブの関係者によるインタビュー調査をもとに、本クラブ自体の問題点を見出した上で、アンケート用紙を作成した。その結果、碧山サッカークラブにおいて、「会費についての保護者の意識」、「指導者の意識の問題」、「生徒のオーバーワークについて」の3つの問題を挙げる事ができた。そこで筆者は、碧山サッカークラブの実態を見出すために、碧山サッカークラブの生徒及び保護者、指導者にそれぞれ質問項目を作成し、クラブに対しての満足度調査に加えて、上記の問題に対するアンケート調査を行った。

#### 【結果と考察】

アンケート調査の結果、次のような結果が得られた。

- ①クラブに対する満足度の要因として、生徒には「グラウンドの広さ」、「練習用具の充実度」、「一緒に練習する生徒数」、「コーチの人数」、「コーチの人柄」、「コーチの教え方」の全てに有意な結果が得られた。
- ②クラブに対する満足度の要因として、保護者には「コーチの人柄」、「コーチの教え方」、「練習用具」、「生徒数」に有意な結果が得られた。
- ③会費については、現在の会費と同じ4000円を回答した保護者が最も多かったが、学年が上がるにつれ、現在の会費が安いと感じている者が多い傾向があり、逆に1,2年の保護者は全て現在の月会費と同じ、またはそれ以下を希望する結果となった。
- ④指導者については、指導年数が多いほど、自己の指導に対する評価が高い傾向が伺えた。
- ⑤生徒が本クラブの練習以外にサッカーの練習をする回数を集計した結果、低学年ではほぼ週1回程度に収まっていたが、（週1回以内の割合が84.6%、週2回以上の割合が15.4%）学年が3,4年以上になると週に2回以上練習をする生徒の割合が58.9%にまで上がった。また、本クラブの練習以外での練習頻度と学年の関係には有意が認められた。
- ⑥本クラブに属する生徒の約6割（59.6%）が本クラブの練習以外にもなにかしらの習い事をしていたが、「学年」との有意は認められなかった。

#### 【まとめ】

調査の結果から、保護者は、本クラブ活動において絶対的権力を持つであろう指導者と、自分の子供との「相性の善し悪し」を評価の対象としていると筆者は推測する。

会費については、少なくとも試合や練習試合の回数の多い高学年については、上げる余地があると推測される。また、オーバーワークの可能性は、61.5%の生徒があると推測されたので、指導者はその事実をふまえた上で、練習量の管理が求められる。以上のことが本クラブにおいての今後の改善すべき主な項目であろう。